



急病や交通事故、けがで救急車が出動する回数は、年々右肩上がりが増えていきます。昨年度に救急車で運ばれた人は6,480人。現在、消防署や病院、そしてけが人・病人のそばにいる人が連携し、より多くの命を救う取り組みが行われています。

現場に出動する医師と救命士

救 進 助 急



医師と救命士が
手を取り合って

「救急指令、救急指令」。消防署で鳴り響く出動命令。装備を身に付け、慌ただしく救急車に乗り込む救命士。その後、救急車には見慣れない白衣の医師が続きます。

津山圏域消防組合では、今年から医師と救命士が密接に連携した救急活動の研修を行っています。医師は、ときには現場にも出て治療を行いながら救命士とともに救急活動を行います。これによって、より適切な救急活動や病院での治療が行われ、1人でも多くの命を救うことが期待されています。



応急手当てが
命を救う

「呼吸の確認は五感を使って!」「心臓マッサージは1分間に100回のペースで!」これは、保育士を対象にした救命講習のようすです。救命士が、談笑を交えながら人形を使って応急手当ての方法を、ていねいに教えていました。

救命講習のお知らせ

3時間の無料講座で、出張も行います。

申込先

個人 回31 1253
団体 回31 1252



救急車が現場に到着するまでの時間は平均でも7分。深刻な場合、けが人や病人はその間にも確実に死へ近づいています。そこで、今見直されているのが、そばにいる人が行う応急手当てです。この研修はその必要から行われ、毎年約800人が「普通救命講習修了証」を受け取っています。

参加した柴山美智子さん(総社保育園)は、「楽しい指導のおかげで心臓マッサージや人工呼吸を体で覚えられました。研修内容を園の先生にも伝え、プールなどでの非常時に役立てたいです」と感想を話していました。



協力・連携が
支える救急・救助

一刻を争う救急・救助。けが人や病人を救うためには、病院に着くまでの処置がかぎを握っています。それが応急手当てや救命士の仕事です。それに加えて、救急・救助の現場を知る医師が病院で治療できればまさに鬼に金棒です。このように、関係者が一体となって、命を救うための取り組みを行っています。



救急・救助についてのお問い合わせは、津山圏域消防組合予防課 回31 12660へどうぞ。